

UIFA JAP●N NEWSLETTER

■主な内容

第21回海外交流の会報告

トルコ大地震から1年 松川淳子さん

連続企画 広がるレースワーク 8

もう一度考える、「レースワーク」

これからの30年:高齢社会に向けて

ユニバーサルデザインを考える「街角のユニバーサルデザイン」

2001年UIFA世界大会へ行こう!

役員会報告

■第21回 海外交流の会報告

トルコ大地震から1年 —被災地はどう変わったか— 松川淳子さん



株式会社生活構造研究所 松川淳子さん

8月26日、千駄ヶ谷のけんぼプラザの会議室で、松川さんの現地報告が行われた。報告の概要は以下の通りである。

トルコの現況

現在、トルコは震災直後のテント村生活から仮設住宅へ移行が進み、次は恒久住宅への移行が課題となっている。テントの多くは既に撤去されているが、一部のテント村は仮設住宅や恒久住宅へ移行するまでの調整用として、再開発の種地のように残されている。またある都市では、もとのまちとは別の場所に新しい都市の建設が進められている。

各国の仮設住宅の違い

視察の中で、トルコの NGO、イスラエル、日本がそれぞれ支援した仮設住宅村を訪れた。イスラエルの仮設住宅村は3戸1棟のコンテナを4つ四角く並べ、中庭をつくっているのが特徴的である。中庭はそれぞれ花や野菜を植えるなど住人によって工夫されている。トルコの木造仮設住宅村では、村の管理人が、通りごとに緑化のコンペティションを仕掛けていて、それぞれ工夫を凝らして生活を楽しくしようとしている様子が見られた。日本のプレハブ村(「日本トルコ村」)は、阪神・淡路大震災の仮設住宅として使われた約1000戸のプレハブを提供したもので、JICAから派遣された鈴木隆太氏(被災地 NGO 協働センター)がコミュニティ支援のため赴任している。



会場からは熱心な質問が出され、ティータイムには、事業担当が用意したトルコのチャイとお菓子を味わった。

出会った住民や行政関係の人達は日本からの支援や関心に対して非常に感謝していたとのことだった。しかし、トルコでは、どんなに仮の住まいでもコンセプトを持って村をつくり、ただ住めればいいとは考えない。そこに日本との違いを感じさせられたとのことだった。

これからのトルコ

震災をきっかけにトルコではボランティア活動が劇的に盛んになり、また、政府もボランティアの意義を認め、活動を支援するようになってきている。女性の経済的自立に対する意識も高まっている。今後、トルコがどのような復興を遂げるのか、関心を持ち続けたいと松川さんは締めくくった。

(喜多素子)

もう一度考える、「レースワーク」

—ブラジルへの旅・DOCOMOMO の会議に参加して—

中村陽子

「ブラジルへ行きたい！」が実現

ブラジルへ行きたいと思ったのは1998年に日本で行われた UIFA JAPON の会議に友人(マリア・アンジェリカ・ダ・シルバ)がはるばるブラジルから参加してくれたのがきっかけでした。大会が終わってすぐに「ブラジルへ行きたい」と言い続けていた私に、AA スクール時代の友人で DOCOMOMO の日本支部立ち上げをサポートしてきた渡辺研司氏 から「2000年9月にブラジリアで DOCOMOMO の会議がある」と連絡があり、彼の活動を見聞きしていた私も自然に DOCOMOMO の活動には興味を持っていました。同じ頃を AA スクールで過ごし、ワークショップを建築計画に取り込もうとしている連健夫氏から、ブラジルで学生の指導をしようと提案されました。AA スクール時代、共に授業を受けた田村元氏と計4人が先生として学生を引率し、現地でワークショップの授業を行う企画です。AA で3ヵ月かけて行うそれを10日で行うというハードスケジュールでしたが、結果としては建物、都市をとて深く読み取れ、なかなか有意義な建築ツアーでした。

レースワークが生み出された背景

10日の内、実質滞在は7泊8日。訪れたのはサンパウロ、マセイオ、ブラジリアの3ヵ所。観光の都市リオデジャネイロもナイアガラの滝より壮大といわれるイグアスの滝も、建築家が市長でその都市計画で知られるクリチバにも行くことはできませんでした。経済の中心地サン・パウロの後、マリアのいる都市マセイオに向かいます。空港でマリアと感動の対面！マセイオでは古い、歴史的な村を訪れます。

サンパウロより北に位置するマセイオは赤道が近いからでしょうか、蒸し暑く感じます。建物は1,2階建ての低層のレンガ造が殆ど。村の人々は裸足にサンダルです。サン・パウロでは信号を待たず皆せわしなく歩いていましたが、ここには信号もなければ車も殆ど通らず、人、そして時々馬が行きかいます。家の戸口にたたずんで人は友人と語り、椅子があれば座って話をします。雨の少ない地域だからでしょうか、大きな腰窓は建具もなく開け放たれていて、覗き込むと天井のない屋根から空が見えます。おおらかな気候が作り出す住まい、人々。その夜はマリアがマセイオの歴史、レースワークが生み出された背景、都市の保存、ランドスケープの視点などをスライドを使って語りました。

翌日は街中の古いマーケットに行きました。サン・パウロと同様、豊かな食材が並び、生活用品の店が迷路のように連なっています。ランチは海の幸メニュー、どれも沢山出され、食欲旺盛な若者ががんばって食べても残してしまいます。ブラジルの習慣として、出された食事は残すのが礼儀、全て平らげてしまうと足りなかったことになるのです。これも豊かな食材が作り出した習慣なのでしょうか。食事の後に歩いた海沿いに並ぶ民家では



マリアさんを囲んで



マリアさんの自宅で

レースワークが作られています。道端でおしゃべりをしながら作る女性達、黙々と一人でカラフルなレースワークを仕上げている若者そして魚網を修理している人々。家々の間からは海が見えます。

黄昏の中マリアの家を訪問します。ここは昔から人々が住み続けてきた所、マリアの家も古い家を改造して住んでいます。スキップフロアで、通りと裏庭とに窓が大きく開け放たれた心地良い家。近隣の住まいも訪問しましたが、その地域はさしずめ「芸術家村」、コンパクトですがどの家もとても個性的な内装で、私たちは歓声を上げ続けました。ある家ではバルコニーの緑が屋根を這い、その緑が屋根瓦の間から2階の寝室を通過して、2階の玄関にまで降りています。こんな緑との共生の在り方もあるのかと感動です。「典型的な中流の家」も訪問しましたがそこは庭にプールのある大邸宅です。ここではプールは泳ぐためばかりではなく、湿度の調整のための必需品なのだそうです。

ブラジルで開かれた DOCOMOMO の会議の意味

ブラジル最後の訪問地ブラジリアは政治の都市です。中央に広がるグリーンベルトから官庁、ホテル、住宅街へと都市は機能的にエリアを振り分けられています。少し高台に建つTV塔から真正面の人工湖から左右に広がる街が見てとれます。

DOCOMOMO の会議が行われるブラジリア大学もサン・パウロ大学と同様、空調機を使わないことを前提に日陰をつくり、風が通り抜ける教室になっています。中央部に中庭を持ち、その両側に教室が配置され蛇のような外形です。会議は2つのレクチャーホールで、Housing, Urban と History & Theory とに分かれて行われていました。私はブラジルの住宅の変遷と住環境についての発表に参加、そこにはヨーロッパの影響を感じましたが、学生と共にバナキュラーについて考えていた私には、とても興味深いものでした。21日夕方に渡辺研司氏の発表がありました。今、築35年のブラジリアでは40周年を記念しようとTVで呼びかけています。近代建築の受け止め方、取り組み方は国によって異なっても、近代建築を持たない国はないでしょう。DOCOMOMO の会議がここで開かれたことは大きな意味があったように思いました。

これからの30年：高齢社会に向けて —日本・北欧会議に参加して—

小谷部育子

福祉国家フィンランドに集う

2000年、ヘルシンキは「欧州文化都市」の一都市として、1年間を通じて、まちをあげて多彩な文化的イベントが展開されています。8月23～25日に開催されたこの会議も、STAKES（フィンランド社会福祉保健研究開発センター）とフィンランドセンター、およびヘルシンキ2000日本委員会が主催した参加行事のひとつです。2015年には国民の4人に1人が65才以上（フィンランドの高齢化率は現在15%、2030年に25%と予測されている）、という超高齢社会の到来を目前に、我が国では今年4月から介護保険制度がスタートしました。誰もが必要となるかもしれない高齢期の自立生活支援に対し公的互助システムができたことは福祉社会の一步として評価できます。しかし、要介護認定や介護サービスの現場ではとまどいや混乱もみられ、健全なかたちで定着していくにはなお多くの議論と試行錯誤が必要とされています。このような時期に、北欧福祉先進国の一つであるフィンランドと日本の高齢者福祉にかかわる制度や政策策定・執行、事業の現場、研究などの第一線で仕事をしている関係者が一堂に会し、交流の機会を持てたことはまことに有意義であったと思います。日本からは、自治体関係者、医療福祉関係者、研究者など70名ほどが参加しました。

会議は第1日目と2日目の午前中は全体会議、午後はテーマA「住宅からの解決」、テーマB「福祉」、テーマC「都市と環境」、テーマD「福祉研究」、の4分科会にわかれて発表・討論が行われました。3日目の視察は、建築、福祉、都市のテーマで3台のバスが用意され、北欧のさわやかな夏を楽しみつつ福祉国家フィンランドの取組みの実状を学びました。ここでは全体会議の模様を紹介し、特に印象に残ったことを報告したいと思います。

会議は芸術デザイン大学の新しいメディアセンターを主会場とし、分科会も大学施設内で行われましたが、“ヘルシンキ2000”の目標であり統一テーマとして掲げる4I（Investment, Innovation, Internationalism, Inhabitants）にふさわしい心憎い場所設定だと感心しました。この大学のキャンパスは陶磁器製品で有名なARABIAの工場群を増築したものです。新たに挿入されたメディアセンターはエントランスのある街路側の古い工場の煉瓦ファサードからは想像がつかない、片側前面ガラスの明るい開放的なホワイエを持つオーディトリウムです。そして工場を改造した分科会室ゾーンは実験工房そのもの、私の担当のA分科会は小映画劇場でした。ベンチャービジネスの育成を柱にしているという、私たちの“大学”概念を越えた教育、施設に圧倒されました。

ハーモニー抜群の男性合唱団によるフィンランド音楽で幕を開け、フィンランドのシニッカ・モンカレ通商産業省大臣、石垣日本大使の挨拶で始まった全体会議第一日目は、「福祉国家としての試みと未来」というテーマでSTAKES副長官とノルウェーのベルゲン大学教授による講演、および「日本における高齢社会への挑戦」というテーマで松田厚生年金事業振興財団常務理事と芦原義信氏のスピーチがありました。介護保険制度導入の経緯や将来構想についての松田氏はややハードな話に対して、大のサウナファンで80歳を越える元気いっばいの芦原氏の

教育・文化論はおおいに会場を沸かせました。

文化は生活の質そのもの

2日目の全体会議のオープニングは、2000年欧州文化都市実行委員長であるジョージ・デリヴォ氏による“ヘルシンキ2000”の紹介でした。氏の“ヘルシンキ2000”への熱い思いや5年間の準備、子供から高齢者までが参加している全部で5000プロジェクト（市民10人に1プロジェクトという割合）という全市あげての大文化イベントであること、なかでも“文化は物質的、精神的、すべての価値の質のレベルのことであり、生活の質そのものである”という言葉が印象に残りました。そのあとは「自治体のサービス提供の責任」というテーマで、フィンランドからは地方自治体連合事務局長代表、エスポー市行政センター長が、日本からは島根県の松尾健康福祉部長と仙台市の加藤副市長の発表がありました。フィンランドは国土の広さは日本と同じくらいですが人口は520万人に満たません。北半分の人口は1～2,3人/km²という国土です。452市町村（平均人口6000人）が、自治体として住宅、教育、健康／福祉サービスに責任を持っており、医療サービスは広域の20エリアで対応しています。ヘルシンキの西に隣接するエスポー市では、自治体の予算の50%が健康／福祉サービスで占め、さらに質的に増加するニーズに対して、サービスの供給者、企画者、消費者の緊密な連携と競争原理により、よりきめ細やかな質の高い顧客本位のサービスシステムを開発することが課題である、との発表でした。現在高齢化8%、人口20万人というエスポー市に対して、既に高齢化率23.4%、15年後には3人に1人が65歳以上という島根県、日本の平均より高齢化率が低けれど20年後には20%という100万都市の仙台の高齢化への取組みを比較することは意味がありません。しかし、「健康長寿第一の県」をめざして高齢者を活力ある地域の担い手と位置づけ、情報提供、自治活動支援、補助金制度などの環境づくりで夢ファクトリー事業など、ユニークな活動をしている島根県、60年代には「健康都市宣言」、その後「環境都市ISO取得」「福祉都市宣言」などがかかげ、積極的に人と自然、人と人の『共生』と『市民協働』による都市デザインをめざして、市民運動や高齢者の活力を生み活かすまちづくりに取り組んでいる仙台市の発表は、国の規模や社会体制を越えて共感を得る内容であったと思います。

フィンランドは1917年に独立を果たした若い国です。福祉国家への道も工業化が本格化した1950年代からで、社会民主党を中心とする連立政権のもとで「高負担高福祉」の国民的合意が培われ、急速に現在のような保健、医療、住宅、教育、労働、環境、文化など、市民生活全般にわたって質の高い総合的福祉環境が整備されてきたということです。そして90年代以降21世紀に向けての課題は、いかに福祉サービスの質の向上と経済的合理性を計るかということで、産官学による研究開発や制度改革を経て自治体が担ってきた福祉事業の民営化が進んでいるところです。会議や視察をとおしても、フィンランド型福祉社会構築の特徴は今までもこれからも国民的合意に支えられた国・自治体行政・研究機関・民間企業の大同団結（パートナーシップ）にある、ということが強く印象に残りました。そしてまた、〈福祉〉とは〈生活の質〉そのもの、すなわち〈文化〉であるということが共有されている社会が真の福祉社会である、という確かな認識を得ることができました。

〒102-0083 東京都千代田区麹町 2-6-5
麹町E・C・Kビル 鶴生活構造研究所内
TEL 03-5275-7861 FAX 03-5275-7866
メールアドレス uifa@LIQL.CO.JP

ユニバーサルデザインを考える
「街角のユニバーサルデザイン」

スカンディナヴィアの街はやたらと自転車が
多。歩道を歩いているとリンリンという音ととも
にすごい勢いで自転車が追い抜いていく。よく見ると
広い車道と歩道の間にはちゃんと線が引かれていて
自転車専用道があった。



自転車スタンド

このすごい数の自転車は皆自分の家から乗ってきたのかしら？という素朴な疑問を持ちながら街を歩いていたら、コペンハーゲン市内で見つけた、鎖で繋がれた自転車が沢山置いてあるスタンドを。

この鎖にコインをいれるとキーがはずれて誰でも利用できる。返す時は市内に100箇所以上あるスタンドどこにでも置けばいい。そしてキーをカチャ！とさしこむと鎖がはずれて入れたコインが戻ってくる。つまり、誰でもどこでも無料で利用できる自転車なのである。なんておおらかなフレキシブルな考えだろう！！

この考えは郊外から市内に通勤、通学する時のパーク&ライドの考え方に似てるな！と思った。(高橋和子)

■2001年UIFA世界大会へ行こう！

すでに、世界大会事務局便り①としてお知らせが届いていると思いますが、次回世界大会はウイーンに決まりました。期間は、2001年7月1日～9日です。大会のテーマは、"Before and After the Active Life"、すなわち、子どもと老人のための建築を考えるというもので、現代の状況をふまえたタイムリーなテーマです。大会の詳細はまだわかりませんが、情報が入り次第、このニュースレターにも掲載して行く予定です。



■広報日より

お詫び 前号43号のナミタ・シンさんの名前はSINGHでした。訂正してお詫び致します。また、諸般の事情により、今号の発行が1週間遅れましたこととお詫び致します。お知らせ 今号から広報担当の一言が入ります。1人30字でなにが伝えられるか、チャレンジ。田中/立場の違ういろいろな方の活躍を、載せていきたいです。須永/会社でも、地域の職能団体の集まりでも広報が重要視されている・・・今

■役員会報告

第6回2000年9月18日(月)

出席者:東 樹川 山田 吉田(欠)、正宗 峯 田中 北本 草野 栗山 中井

議事:・第21回海外交流の会 総括 参加者会員22名、非会員6名、合計28名

・第22回海外交流の会、川西 芳氏を講師として企画中

・来年度総会に向けての事業・広報活動について

次回の総会から、会員の発表を行う企画を検討し、UIFA新会員募集のシフレットを来年度に向けて作成する

・会員区分別ワーキング設置について

①ワーキング事務局の設置

②ワーキング主催者長が務める

③ワーキングメンバー事務局役員と監督役

④必要に応じて、ヒアリング等を行うことができる

⑤概ね2000年度2月ごろまで結論を出す

第7回 2000年10月20日(金)

出席者:飯島 樹川 山田 日高 吉田(欠)、峯 渡辺 正宗 草野 栗山 柳沢

議事:・第22回海外交流の会 2000年11月18日(土) 1400~1600

けんぼプラザ3F

講師 児童文学者 川西 芳氏「みることとみえること」

・今年度活動計画

事業委員会:2001年度海外交流の会テーマ検討、コンペ・プロジェクト・総会の運営検討、ワークショップ開催の立案

総務・財務:UIFA JAPON会員区分別ワーキング計画

①会員ヒアリングの検討(川島直 愛知 兵衛)

②アンケートの検討

③ホームページ開設の検討

広報委員会:「この指止れ」

一ケアタウンハウスかのす(秋田県)見学準備中

UIFA JAPON 広報パンフレット立案

・UIFA 世界大会開催決定

日時:2001年7月1~9日 開催地:オーストリア(ウイーン)

テーマ:Before and After the Active Life

・鳥取県西部地震被災者に対する支援は、栗山 楊子、小島久実のよびかけで、

UIFA JAPON有志名義で5万円寄付 (飯島・田中)

村/会議は踊る。次回国際会議はウイーン。参加しましょう。飯島/新入りです。皆さんの足を引っ張っています。北本/ご無沙汰しております。95%以上の時間を埼玉県で過ごしています。六反田/連載「UD」を考えるは会員全員に執筆をお願いします。井出/三宅島2000年帰還するか。ある日、子どもたち300人とディズニーランドで遊ぶ。渡辺